

平安末期における「けこのうつつはもの」

——「伊勢物語の高安の女」補遺——

一 旧稿の過誤

平成十六年二月十七日発行の『国文学』第八十八号に、私は「伊勢物語の高安の女―二十三段第三部の二つの問題―」と題する論文を発表した。その「二つの問題」のうち最初に取り上げた問題については、いまは省略する。論文の後半で、私は、伊勢物語第二十三段に見える「けこのうつつはもの」という表現、中でもとりわけ「けこ」という語の解釈について論じた。伊勢物語第二十三段の第三部で、「まれまれ」高安に來た主人公は、高安の女が「今はうちとけて、手づから飯がひ取りて、けこのうつつはものにもりける」姿を見て、「心うがりて」、高安に行かなくなる。この「けこ」について、江戸時代初期までのおもな注釈はすべて「家子」すなわち一家眷属の者たちの意に捉えて

山本登朗

いたが、賀茂真淵が「伊勢物語古意」に、

……「けこ」は、或説に家の子にて家人奴婢の事といへるも理りなきにあらねど、古本に「餼子」と書、万葉にも「家」にあれば筥に盛る飯を」ともあれば、飯餼の器てふ意也けり。

と述べて以来、飯を盛る食器とする説が一般化する。これについて、旧稿では、真淵が新説の根拠としていた「古本」すなわち伊勢物語真名本の表記やさまざまの文献を検討し、この「けこ」はやはり食器でなく一家眷属の者たちの意に理解すべきであることを述べた。そして、「賀茂真淵の『伊勢物語古意』より以前には、食器の意の「筥子」という語は存在しなかつたと言わねばならない」と結論づけた。

これに対して、早乙女利光氏は「伊勢物語」二十三段考―

「けこのうつつはものにもりける」の解釈と和歌の役割―」（『文学・語学』一八七号・平成一九年三月）で同様の問題を検討され、藤原成範（文治三年・一一八七年没）の作かとされる『唐物語』第四の「孟光、夫の梁鴻によく仕ふる語」に、

……この男をまたなきものに思ひて、かしづき敬ふこと思ふにもすぎたりけり。朝な夕なに飯がひとりて、けこのうつつはものに盛りつつ、眉のかみに捧げてねんごろに進めければ、斉眉の礼とぞ今は言ひ伝へたる。

と、伊勢物語第二十三段をふまえた「けこのうつつはもの」という表現が見えることを指摘された。早乙女氏は、賀茂真淵以前には「けこ」は「家子」の意であったという前提のもとに、この『唐物語』の該当部分をどう解釈すべきかについて、さまざまな工夫をこらしておられるが、『唐物語』のこの「けこ」は、食器の意の「筥子」と考えた方がはるかに自然である。「賀茂真淵の『伊勢物語古意』より以前には、食器の意の「筥子」という語は存在しなかった」という私の旧稿の結論は、間違っていたと言わなければならない。それでは、伊勢物語第二十三段の「けこ」について、どのように考えればよいのか。本稿は、早乙女氏の指摘をふまえつつ、旧稿を補訂しようとする試みである。

二 殷富門院大輔の一首から

早乙女氏はまた、同じ論文の中で、「けこ」の語や「けこのうつつはもの」という表現を用いた和歌として、次の二首をあげておられる。

〔現存和歌六帖〕第五・二三四

家とうじを思ふ

知家

高安のみもとははやくなれにけり手づからけこのそなへをぞやる

〔殷富門院大輔集〕二二四

また、けこのうつつはものなどおきつつ、しひの葉に盛らぬにや、住みなれたるさまどもしたるに

ことわりやおのがさとごとふり捨ててすみよしとのみ思ひがほなる

これも『唐物語』と同じように私が見落としていた、重要な用例の指摘であった。いま私が傍点を打った部分を見ればわかるように、この両者はともに、あきらかに伊勢物語をふまえている。早乙女氏はそのことを確認しただけで、それ以上これらの例を検討しておられないが、実は重要なことがらが、ここから浮かぶ上がってくるように思われる。最初の知家の歌は、ど

のような趣旨で詠まれた歌か、いまひとつ明白でなく、また、ここで「けこ」がどのような意味で使われているかについても、さだかにしがたい。いま注目したいのは、二首目の殷富門院大輔の歌の、おそらくは殷富門院大輔自身によって書かれたと思われる詞書である。そこには「けこのうつはもの」という表現とともに、「しひの葉に盛らぬにや」という言葉が記されている。この言葉は、言うまでもなく、万葉集のよく知られた次の二首（巻二・一四一―一四二）のうち、後者の一首をふまえている。

有間皇子みづから傷みて松が枝を結ぶ歌二首

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む

家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

この歌がふまえられているとすれば、当然のこととして、「殷富門院大輔集」二二四番歌の詞書の「けこのうつはもの」という表現は、この同じ万葉歌の「筥」という語と同じ意味で使われているということになる。すなわちこれもまた、賀茂真淵以前に用いられた、食器の意の「筥子」という語の用例だったのである。

「殷富門院大輔集」を見ると、この二二四番の詞書と歌は、次のような一首（二二三）に続けて記されている。

長月の十日ごろ、住吉に人々具して詣でて、浜の飯屋
どもめづらしくて、壺ども多くとり並べたるに

いちの壺落ち入りてこそゆかしけれこの世のほかの住ま
まほしさに

すなわち、殷富門院大輔は人々を誘って住吉神社に参詣したが、その際、住吉の海岸に作られた飯屋で、おそらくは休息して食事を取った。大輔はその飯屋のありさまを珍しがって、二二三番・二二四番の歌に詠んでいると考えられる。二二三番歌の解釈はいま省略するが、二二四番歌の詞書に述べられているような、他郷から来たらしい飯屋の住人たちが、椎の葉に飯を盛るのではなく、いかにもそこに「住みなれ」た様子で食器、すなわち「けこのうつはもの」などを並べている情景について、二二四番の歌はいささか戯れつつ、ここは「すみよし（住みよし）」なのだから、故郷を捨てて住み着こうとするのも当然だと詠んでいる。

殷富門院大輔たち花林苑グループの歌人たちは、しばしば連れだつて難波にかけており、その際、自分たちを難波に下つた伊勢物語の主人公に見立てた歌をしばしば詠んでいることが、松野陽一氏「花林苑の原型―難波塩湯浴み道遙歌群注解」（初出昭和五七年、後に「鳥帯 千載集時代和歌の研究」（平成七年・

風間書房)に収録)によつて指摘されている。いま問題にして
 いる「けこのうつはもの」という表現は、伊勢物語の難波下向
 の章段に用いられているわけではなく、また歌ではなく詞書の
 表現ではあるが、同じ伊勢物語の語がここでことさらに用いら
 れているのも、おそらくは類似の傾向のあらわれであろう。そ
 れが有間皇子の歌の言葉と重ねられているのも、都からはるば
 る住吉までやって来た自分たちを、有間皇子に重ねて表現しよ
 うとしたものと考えられる。(たとえば「俊頼髓」は有間皇子
 のこの二首について、「山野にゆきまどひて……詠み給へる歌な
 り」と記している。)その有間皇子の歌の「筥」を、殷富門院大
 輔は「けこのうつはもの」と言い換えているのである。

ところが、その一方で、当時、「けこ」は「家子」の意の語と
 してはつきりと認識されてもいた。旧稿でも紹介したように、
 『角川古語大辞典』の「けこ」の項には、殷富門院大輔とも親し
 かった顕昭の『散木集注』の、「流しつるけこのみわもり……」
 という俊頼の歌に対する、次のような注記が用例としてあげら
 れている。

けこは家子なり。伊勢物語にも「けこのうつはもの」と書
 けり。

平安末期には、「けこ」(または「けこ」)について、このよう

に、異なった二種類の理解が同時に併存していたと考えられる
 のである。

三 万葉集享受と伊勢物語

殷富門院大輔集によれば、殷富門院大輔は少なくとも二度、
 大和国石上の柿本人麿の墳墓を訪れ、経供養などをおこなつて
 いる(山本「古注」前史―平安末期の伊勢物語享受―)「国語
 と国文学」平成二三年一月)。この墳墓は、藤原清輔によつて
 発見されたもので、その事情は清輔の「袋草紙」や顕昭の「柿
 本朝臣人麻呂勘文」に詳しいが、その背景には、元永元年・一
 一八に清輔や顕昭の祖父、藤原顕季によつて始められた人麿
 影供に象徴されるような、人麿崇拜の時代風潮があった。そし
 てさらにその後には、万葉集をあらためて重視しようとする、
 当時の歌壇全体の大きな動きがあったと思われる。よく知られ
 ているように、このころ、「次点」と呼ばれる万葉集の訓読作業
 がおこなわれ、また万葉集歌を抄出・部類した「類聚古集」な
 ども編纂されている。平安末期は、万葉集がさかんに読まれ、
 重んじられた時代なのである。さきに見た、殷富門院大輔集二
 二四番歌の詞書が、万葉集の有間皇子の歌をふまえて書かれて

いたのも、そのような時代背景のひとつのあらわれと考えられる。

この有間皇子の歌は、「古今和歌六帖」にも収録され、またさきに見たように「俊頼髓腦」、そしてまた「古来風体抄」等の歌論書にも見える、当時でもよく知られた一首であった。この歌に見える「筥」という語は、他にはほとんど歌に詠まれることのない、それだけに印象的な語と言え、それが、殷富門院大輔集の詞書にはつきりと示されているように、伊勢物語の「けこ」という語の解釈にも影響を及ぼし、「けこ」も「筥」と同じく食器の意味の語であると考えられるようになったのではないかと推測される。さきに見た「唐物語」第四に見える用例も、そのような事情によって広まった「けこ」についての解釈（伊勢物語自体にとってはもちろん誤った解釈）に基づいた用例であったと考えられる。

それから五百年以上も後の時代に、先に見たように賀茂真淵は、真名本の表記のほかに、やはりこの有間皇子の一首を根拠に挙げて、「けこ」が「筥」と同じ意味の語であると主張した。時を隔てて、二度にわたって、万葉集のこの歌は、伊勢物語の解釈に、同じような影響を与えたのである。

四 伊勢物語と「唐物語」

さて、早乙女利光氏が問題にしておられる「唐物語」第四「孟光、夫の梁鴻によく仕ふる語」の全文は、次のようである。

昔、梁鴻といふ人、孟光にあひ具して年ごろ住みけり。この孟光、世に類なくみめわろくて、これを見る人、心を惑はして騒ぐほどなりけれど、この男をまたなきものに思ひて、かしづき敬ふこと思ふにもすぎたりけり。朝な夕なに飯がひとりて、けこのうづはものに盛りつつ、眉のかみに捧げてねんごろに進めければ、斉眉の礼とぞ今は言ひ伝へたる。

さもあらばあれ玉の姿も何ならずふた心なき妹がためには

志だに浅からずは、玉の姿花の形ならずとも、まことに口惜しからじかし。

作者はここで「世に類なくみめわろくて、これを見る人、心を惑はして騒ぐほど」であった醜女孟光が、梁鴻にかしづき仕えたことをおもに述べ、末尾に「志だに浅からずは、玉のすがた花のかたちならずとも、まことに口惜しからじかし」と記しているが、その出典である「後漢書」梁鴻伝によれば、孟光は

五 さまざまな享受史

単に醜女だっただけではなく、賢人を求めて「年三十」まで「嫁」せずにいたところ、乱世を嘆いて「俱に深山に隠るべき者」を求めていた梁鴻に見込まれて妻となり、「黙々」として行動を起こさない夫を励まして山中に入り共に生きた、尋常ならざる女性である。藤原成範かとされる「唐物語」の作者は、この女性が夫に仕えるさまを描写するために、「けこ」を食器の意と誤解しつつ、伊勢物語第二十三段の描写を借り用いている。だとすれば、「唐物語」の作者が捉えた伊勢物語第二十三段の高安の女は、ひたすら夫に尽くす点で孟光に近い要素を持った女性であったということになる。伊勢物語の主人公は、そんな高安の女を「心うがりて」来訪をやめるが、「唐物語」作者の男女関係についての価値観は、もとより伊勢物語の主人公とはまったく異なっていた。それを承知のうえで、「唐物語」の作者はあえて、人々によく知られていた伊勢物語第二十三段の描写を借用していると考えられるのである。ひとつの個人的な、かつ興味深い伊勢物語享受、批判的享受とも言うべき語句利用の姿が、そこには見られるように思われる。

すでに旧稿でもさまざまな面から考察したように、また竹岡正夫氏の「伊勢物語全評釈」（昭和六二年・右文書院）や片桐洋一氏の「校注古典叢書 伊勢物語」（新装版、平成一三年・明治書院）ですでに主張されているように、伊勢物語第二十三段の「けこ」は、正しくは「家子」、すなわち一家眷属の者たちを言う言葉であった。第二十三段の高安の女は、主人公にうち解けた後、「手づから飯がひ」を取るという下賤なふるまいを見せただけでなく、せっかく来訪した主人公を放置して、家の従者や下人たちに配分を考えつつ食事をあてがうという、いかにも一家の女主人にあさわしい仕事に没頭した。主人公は、そのような女の姿を「心うがり」、来訪の意欲を失ったのである。

そのような伊勢物語第二十三段の「けこ」の語は、以上のように、平安時代末期にすでに食器の意に誤解されていたが、それは一部の人々の間にとどまり、やがて姿を消していった。その後、賀茂真淵に至って再び同じ解釈が主張され、誤った通説となつて現代に至っている。

古典文学は、それぞれの時代に、さまざまな思いを抱きさまざまな教養や知識を持った多くの人に読まれ、多様な形で享受

されてきた。より古い時代の解釈がより正しいとは限らず、同じ時代にも当然複数の解釈があり得た。本稿は、とりあえず伊勢物語第二十三段について、その複雑な享受史の一端をかいまみにすぎない。

(やまもと　とくろう／本学教授)